

8 頭頸部がん患者における放射線治療に伴う有害事象の変化と

食事に関する因果モデルの検証

○大釜 徳政(関西福祉大学看護学部)

I. 目的 本研究は頭頸部がん患者を対象として、放射線治療にともなう有害事象、唾液分泌量の日内変動、鎮痛剤の使用、口腔ケアの回数、対象特性および食欲との関連性を明らかにした上で、嗜好性、食物特性、献立全体に対する知覚、食欲に影響する時間帯と食欲の保持に関する食事の因果モデルを明らかにすることを目的とした。

II. 方法対象者：X線で外部照射中あるいは終了後7日以内の患者257名。データ収集：味覚感度調査 [濾紙ディスク法]、口腔内乾燥調査 [口腔乾燥臨床判断基準]、口腔粘膜炎 [CTCAEv3.0 得点]、口腔・食事に関する質問票、鎮痛剤の使用、口腔ケアの回数、対象特性を調査した。倫理的配慮：大阪大学医学部保健学科の倫理委員会ならびに協力施設の倫理委員会の承認を得て実施した。対象者には研究参加と中断の自由、匿名性、個人情報守秘性などについて、文書を用いて説明し同意書にて確認した。

III. 結果 まずパス解析を用いて20/30/50Gyの食欲に影響する項目を検証したところ、20Gyの食欲は喫煙指数、年齢、味覚感度から影響を受け ($R^2=0.48, p < 0.001$)、30Gyの食欲は口腔ケアの回数、口腔内乾燥、年齢、味覚感度、口腔粘膜炎から影響を受け ($R^2=0.52, p < 0.001$)、50Gyの食欲は唾液の出にくい時間帯【朝】、口腔ケアの回数、口腔内乾燥、味覚感度、鎮痛剤の使用、口腔粘膜炎から影響を受けることが明らかとなった ($R^2=0.62, p < 0.001$)。次に構造方程式モデリング [SEM:Structural Equation Modeling] を用いて食事に関する因果モデルを検討したところ、20Gyの時期における食事に関する因果モデルは、時間的關係から【嗜好性に対する知覚】と【食欲の保持】の間に【食感と温度に対する知覚】【味付けと匂いに対する知覚】【献立全体に対する知覚】の3つの媒介変数を、30Gyのモデルでは【食形態に対する知覚】を加えた4つの媒介変数を位置づけてパスを想定した場合に適合度指標が上昇し、当てはまりの良いモデルとなった。50Gyの時期における因果モデルでは【温度と匂いに対する知覚】と【食欲の保持】の間に【食形態に対する知覚】【食感に対する知覚】【味付けに対する知覚】【献立全体に対する知覚】の4つの媒介変数を位置づけてパスを想定した場合に当てはまりの良いモデルとなった。さらにこのモデルでは、20Gyと30Gyの因果モデルで認めなかった【食欲に影響する時間帯】が【食欲の保持】に影響するという因果関係も認められた。

※本研究は平成18-19年度文部科学省研究補助金(若手B)、平成20-21年度文部科学省研究補助金(若手B)および平成20年度聖ルカ・ライフサイエンス研究所研究助成を受けて実施した。